

聖書:ダニエル書6章1～15節

説教:いつものように神に祈る

はじめに

知恵と洞察力に富んでいたダニエルは、南王国ユダから補囚の身となってバビロンに連れて来られ、やがてネブカドネツアル王に仕えるようになります。王が夢の中で二度にわたって幻を見たときは、ダニエルがその幻の意味を解き明かすことによって、やがてネブカドネツアルはダニエルが仕えていた神を信じる者となり、それで終わらず、全国民に向けて自分がどのようにして神を信じるようになったのかを証しました。

それから時が過ぎ、ネブカドネツアルの孫にあたるベルシャツアルが千人の貴族を招いて、祖父がかつてエルサレムの神殿から持って来た金の器で酒を飲み、ほかの神々を賛美していたとき、突然人の手の指が現れ、壁に何か文字を書き記します。ベルシャツアルはこれを見てがたがたと震え上がり、ダニエルが呼ばれて文字の意味を解き明かすことになりました。「ベルシャツアル王よ。あなたは、祖父から本当の神がどなたであるのかを聞いて知っていたのに、その神をあがめずかえって自分を誇り、ほかの神々をほめたたえた。そのため、神はあなたの治世を終わらせた。」このようにダニエルが告げたまさにその夜、ベルシャツアルはメディア人ダレイオスの手で殺され、栄華を極めたバビロン帝国は滅んでいきます。

ダニエルは、このダレイオスにも仕えていくことになるのですが、その先には新たな試練が待ち受けていました。そこにどのような神のみこころがあったのか、ともに考えてまいります。

## 1 メディア人ダレイオス

### 1) 人物

その前にまずダレイオスとは何者なのか、確認しておきます。歴史学者の間では、ペルシャのキュロス2世がバビロン帝国を倒したというのが通説で、実際にキュロスの名前は6章の最後と10章にも登場します。ではこのダレイオスとは何者なのかということになる。ところが彼に関する資料が見つかっていないのでわからない。そこである方は、ダレイオスはバビロンを倒した翌年に亡くなり、キュロス2世がそれを継いで王となったのではないかと説明しています。

### 2) 禁令を出す

それはそれとして、ダレイオスがバビロンを支配することになりました。自分が直接国を治めるのではなく、旧バビロン帝国で働いていた有能で忠実な人物を選び、その人たちに国を治めさせるという方法をとります。そのトップに選ばれたのがダニエルでした。理由は3節にあります。「さて、このダニエルは、ほかの大臣や太守よりも際立って秀でていた。彼のうちにすぐれた霊が宿っていたからであった。そこで王は、彼を任命して全国を治めさせようと思った。」

ダニエル以外的大臣や太守たちはもともとバビロンに住んでいた人達です。ところがダニエルはユダヤ人。捕虜として連れて来られた人間が自分たちの国の政府のトップに座る。それだけでも複雑な感情が生まれます。加えて、ダニエルは自分たちとは違う神を信じています。例えていえば、今日は正月だからみなで神社に新年のお参りに行こうと誘っても、ダニエルは来ないので付き合いが悪い。どうしても溝ができて、おもしろくありません。

そうするとどうなるか。4節。「大臣や太守たちは、国政についてダニエルを訴える口実を見つけようとしたが、何の口実も欠点も見つけられなかった。彼は忠実で、何の怠慢も欠点も見つからなかったのである。」

日本では「出る杭は打たれる」とか、「足の引っ張り合い」だと言われることがあります。ここで彼らがやっていることはそれと同じです。目障りで邪魔なダニエルをどうやって引きずり降ろすか一生懸命になる。訴える口実が何も見つからないとわかると、今度は罾にかけることにする。6節から9節。「それでこの大臣と太守たちは、王のもとに押しかけて来て、こう言った。『ダレイオス王よ、永遠に生きられますように。国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、断固たる禁令を出していただくことに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、いかなる神にでも人にでも、あなた以外に祈願をする者は、だれでも獅子の穴に投げ込まれる、と。王よ、今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシアの法律としてください。』そこで、ダレイオス王はその禁令の文書に署名した。」

## 2 ダニエル

### 1) 以前からしていたように

これに対してダニエルはどうか。10節。

「ダニエルは、その文書に署名されたことを知って自分の家に帰った。その屋上の部屋はエルサレムの方角に窓が開いていた。彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた。」

自分に対して罣が仕掛けられたことを知ったら、ふつうどうするか。「相手に訴える口実を与えないよう、しばらくおとなしくしてよう。三十日間我慢すればよいだけだ。」こう考えるでしょう。ところがダニエルは、何事もなかったようにいつもと同じように日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈った。そうしたら現場を押さえられて告訴されてしまったのです。

## 2) 家の窓が開いていた

でも敵はどのようにしてダニエルが神に祈り求め、哀願しているのを見つけたのでしょうか。窓です。窓から監視されていた。どんな窓であったか。そこを読みます。「その屋上の部屋はエルサレムの方角に窓が開いていた。」

自分が仕える神がおられるエルサレム神殿に心向けられるために、ちょうどエルサレムの方角に窓を作らせたのでしょうか。その窓からダニエルが祈っている姿が目撃されてしまいました。信仰深いことがあだになってしまった。なんとも皮肉な話です。

## 3) 敵に四方を囲まれる (ダビデの場合)

いくつか疑問が湧いてきます。王が禁令の文書に著名したのをダニエルが知ったとき、自分を訴えるために敵が四方から自分を取り囲んで監視してくると当然予想したでしょう。それなのに、いつものように無防備な状態で神に祈ったのはなぜか。その時ダニエルは何を思ったのかは書かれていません。なにも恐れることなく、心は平安に満たされていた、ということだったのでしょか。

これと似たような状況に立たされたのがダビデという人でした。彼はそういうときどうしたか。参考のために例えば詩篇42篇9, 10節を取り上げてみましょう。「私はわが巖なる神に申し上げます。「なぜあなたは私をお忘れになったのですか。なぜ私は敵の虐げに嘆いて歩き回るのですか。」私に敵対する者たちは私の骨を砕くほどに私をそしり絶えず私に言っています。「おまえの神はどこにいるのか」と。」

ダビデがこうだったのでしょか、ダニエルだって同じだったのでしょか。敵が罣を仕掛けたことを

知ったとき、心を乱しながら家に帰ったのではないか。でもだからと言ってどこかに逃げようともしなかった。ただ以前からしていたように神に祈り、感謝していきます。そしておそらくダビデのように、「敵対する者たちが私をそしっています」と祈ったでしょう。でも結局ダニエルは告訴されて、獅子の穴に投げ込まれてしまいます。

## 3 神

### 1) エルサレムの方角に窓が開いていた

この先どうなっていくのかは次回詳しく見ることにして、今日はここまでのことから私たちは何を学ぶのかを考えます。すぐ思いつくのは、もし私たちがダニエルのような目に遭ったら、ダニエルのように窓を開けて正々堂々と祈れ。どんなときにも隠れて祈ってはいけない、そういうことでしょうか。

よくあることですが、私たちはいつの間にか、問題の本質を忘れてしまって、目に見えるところだけに注目して、本来の目的を忘れ、するのかもしれないのかという議論をしがちです。そうやっていつの間にか、イエスが厳しく非難した律法学者たちと同じようなことをしてしまうかも知れません。

ではどう考えるのか。ダニエルはどんな部屋で祈ったのでしょうか。そこに注目します。エルサレムに向けて窓が開かれていた部屋でした。それがすべてのことを象徴していると思います。窓は神に開かれています。たとえ試練のときでも、彼は神に対して「以前からしていたように」自分の心を神に向けて開いて祈った。その祈りの姿勢はダビデも同じです。それである詩篇のにある祈りを祈ることになりました。どこで祈ればよいのかとか、そのような場所のことを問題にしているのではない。神に対して心を開くのか、それとも開かないのか。目に見えない心の内側がどうなのか。神はそこをご覧になります。では、いったいどこまで心を開くのでしょうか。ダニエルは、敵に弱みを握られてしまうほどに、神に心を開きました。

こう言うと反発する方がいます。心の内側を誰にも覗かれたくない。かくしておきたい。神であっても絶対に触れて欲しくない。私はかつて信仰を持つ前、妻にどんなに誘われても教会に行こうと思わなかった。心の中のことを覗かれるのではないか。それはいやだと思っていたからでした。

しかし、もしいつまでも神に心を開かなかったなら、いつかは大丈夫と思っても、結局いつまでも罪によって苦しむことになります。

## 2) イエス・キリストがしてくださったこと

そんな私たちのためにイエス・キリストは率先して私たちの模範となり、神に対して心を開きます。最後にその一例を見ます。ある安息日のことです。会堂の中でイエスを訴えようと監視していたパリサイ人の前でこの方はこう言われます。マルコの福音書3章4節。「安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも殺すことですか。」そうしてから片手のなえた人をいやされます。その結果、パリサイ人はヘロデ等の者たちといっしょになってイエスを殺す相談をはじめていく。

このようにして主は訴えられ、やがて十字架にかけられていきます。主を訴える者があっても、主は私たちを救うために、いのちの危険を顧みず、父なる神に向けて完全に心を開いてくださいました。その恵みを覚えながら、私たちはこの方の信仰に従って歩んでまいります。